

肥料要素がオオバの初期生育に及ぼす影響

表1 施肥量および施肥後土壌の化学性

処理区	施肥量(mg/ポット)			pH	EC (dS/m)	無機態N (mg/100g)	有効態P ₂ O ₅ (mg/100g)	交換性K ₂ O (mg/100g)
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O					
P無	340	0	340	6.5	0.46	27	15	27
P多	340	340	340	6.5	0.33	30	26	23
K無	340	68	0	6.5	0.37	29	18	14
K多	340	68	1,020	6.6	0.61	29	18	53
標準	340	68	340	6.6	0.52	34	20	30

注1) 1/5,000aワグネルポットを使用、各区3反復

注2) 供試土壌：灰色低地土、有効態P₂O₅：19mg/100g、交換性K₂O：7mg/100g

注3) 全区にバーク堆肥 102g/ポットを施用

注4) pH、ECともに土：水＝1：2で測定

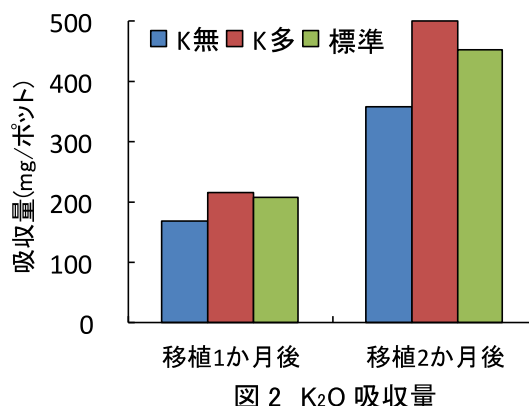
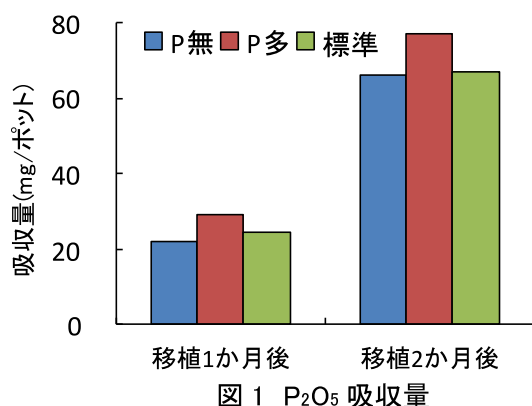


表2 施用量が初期生育に及ぼす影響

処理区	草丈 (cm)	葉色 (SPAD)	乾物 生産量 ²⁾	
			収量 (g/ポット)	生産量 ²⁾ (g/ポット)
P無	34	29	17	18
P多	33	27	17	18
K無	32	29	16	17
K多	31	28	15	17
標準	32	29	16	18

z) 地上部(整枝摘葉、収穫葉含む)と地下部の合計

注) 播種日：平成30年1月9日、移植日：2月20日、

収穫開始日：3月23日、調査終了日：4月23日



写真1 移植2か月後の生育状況
(左からP無、対照、P多)

高知県では作物別施肥基準を設定し、土壌診断に基づいた施肥の適正化を進めています。オオバでは、平成29年に現地2ほ場で実態調査を実施したところ、土壌中の有効態P₂O₅および交換性塩基類が過剰に蓄積していることが明らかとなりました(センターニュース第90号)。そこで、施肥基準見直しの基礎資料とするため、P₂O₅、K₂Oの施用量がオオバの初期生育(移植後2か月間)に及ぼす影響を調査しました。

試験は、有効態P₂O₅および交換性K₂Oが低レベルの土壌を供試して、P₂O₅、K₂O無施用、標準施用、多施用(標準に対してP₂O₅が

5倍量、K₂Oが3倍量)とした、計5処理で実施しました(表1)。

その結果、吸収量はいずれも多施用でやや多く、K₂Oでは無施用でやや低下したものの(図1、2)、施用量の違いによる生育、収量差は認められませんでした(表2)。

以上より、P₂O₅、K₂Oが低レベルの土壌においても施用量の違いが初期生育へ及ぼす影響は小さいことが明らかになったことから、今後は塩類蓄積ほ場での施肥基準の見直しにつなげていく予定です。

(土壌肥料担当 宗石佳奈 088-863-4915)